

いわさきちひろ 子どものしあわせ—12年の軌跡

●2020年3月1日(日)~5月17日(日)

主催：ちひろ美術館

特別協賛：株式会社 ショウエイ

協賛：小野谷機工株式会社



図1 スイートピーとフリージアと少女 1963年

いわさきちひろは、雑誌「子どものしあわせ」の表紙絵を1963年3・4月合併号(図1・2)から没する74年までの12年間、毎月1冊のペースで描き続けました。臨時増刊号も含めるとその数は約150点にのぼります。子どもをテーマに自由に、デザインも含めてすべてちひろのセンスに任せたいという依頼に、ちひろは意欲的に取り組みます。

構図と線

前半の1968年までの作品は、主に鉛筆による線画で描かれています。出版社の制作費の都合で、一般的な4色のインキで刷るフルカラー印刷ではなく、刷り色を減らした2~3色刷りで、という制約があったからです。黒ともう1~2色を使って、線画で描いた子どもが印象的に見えるような画面構成に注力します。文字の位置を変えたり、窓をあけたり、部分的に色を抜いて白を生かすなど、さまざまな構図の工夫により、画面に広がりや奥行きをつくり出しました。

ちひろがこの時期に描いた鉛筆の線画は、線に無駄がなく、豊かな表情が魅力的な描線です。長年スケッチを重ね、自分の線を究めてきたちひろは、1966年から手がけた童心社の<若い人の絵本>シリーズを鉛筆と薄墨で描いています。

水彩のにじみ

1968年、ちひろは新しい絵本づくりに



図5 夏の草むら 1973年

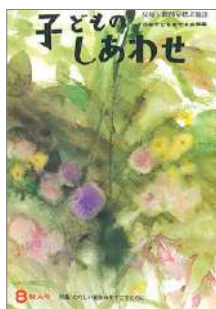
図6 夏の草むら
「子どものしあわせ」(草土文化)
1973年8月号表紙

図2 スイートピーとフリージアと少女「子どものしあわせ」(草土文化) 1963年3・4月合併号表紙



図3 黄色い風船を持つ少年「子どものしあわせ」(草土文化) 1968年11月号表紙



図4 夏の宵の白い花と子ども「子どものしあわせ」(草土文化) 1969年7月号表紙

挑戦します。至光社の編集者武市八十雄と制作した、絵で展開させる絵本『あめのひのおるすばん』は、揺れる子どもの心情をたっぷりと水を含ませた水彩のにじみで表現しています。感じさせることに重点をおき、説明的にならないよう一番大事なものを描く、そのために勢いを大事にする。こうした制作の指針は、その後のちひろの画風に大きな転機をもたらし、「子どものしあわせ」の表紙絵にも変化が生じます。「黄色い風船を持つ少年」(図3)では構図への意識よりも、子どもへの思い入れが強く感じられ、線にも流れるような勢いが見られます。

1969年5月号から表紙がフルカラー印刷となり、ちひろは水と水彩絵の具が自然に生み出すにじみの特徴を生かした画風を展開していきます。余白をたっぷりとした背景の白地を生かして印象的な色をにじませたり、にじみの色面のなかに子どものシルエットを白く塗り残した作品(図4)などが多く描かれます。子どものいる空間そのもの、刻々と変化する光、空気の色や匂い、漂う情感を繊細なにじみの色合いで表現しているようです。

パステルから水彩へ

1970年、ちひろは至光社の3冊目の絵本『となりきたこ』で、新たな画材としてのパステルに出会います。パステルは塗り込むことでやわらかな色面を表現

できる画材ですが、ちひろはあえて線描に用い、大きめの紙に腕のストロークを使って勢いのある画面を描き出します。鉛筆の細やかな表現とは異なるパステルのダイナミックな線描の作品はこの年に集中的に描かれ、以降、ちひろはこの勢いを水彩の筆勢に生かしていきます。73年には太い筆で素早く、表紙絵の版型にとらわれずに大きく描いた花や子どもの顔を大胆にトリミングした作品(図5・6)を発表しました。トリミングによって作品の一部分がクローズアップされ、新たな印象の作品があらわれたようです。見つめる対象のいのちの輝きを画面に写し取るようなちひろの気迫が伝わってきます。

晩年のちひろは能楽の世阿弥の『花伝書』を愛読し、その芸術観に共鳴していました。絵本『ひさの星』『戦火のなかの子どもたち』の制作で、説明的要素を省き、抑えた表現で余韻を感じさせる表現を心がけ、「子どものしあわせ」表紙絵でも精神性の高い作品を次々と描き出しました。

創作意欲を開花させて

さらなる画境を模索していたちひろでしたが、1974年8月8日、55歳の生涯を閉じました。8月号の表紙「あかちゃん」(図7)が絶筆となりました。

日本子どもを守る会編集「子どものしあわせ」は、父母と教師を結ぶ雑誌でもあり、ちひろの絵のファン層を大きく広げました。戦争体験を持ち、世界の平和と子どものしあわせを願うちひろの想いと同一書名の「子どものしあわせ」は、画家としての新たな表現を追い求めたちひろにとって、さまざまな試みに挑戦できる魅力的な仕事でした。

四季を彩る草花や小動物とともにいきいきとした子どもたちの姿が描かれたこの作品群は、ちひろの画業における各時代の代表作を生み出し、ちひろの絵の変遷を知るうえでも重要な指標となっています。(徳永美幸)

図7 あかちゃん(絶筆)
「子どものしあわせ」(草土文化)
1974年8月号表紙

〈企画展〉没後10年 瀬川康男

坦雲亭日乗—絵と物語の間

●2020年3月1日(日)～5月17日(日)

主催：ちひろ美術館

特別協賛：株式会社 **シヤクエツ** 協賛：小野谷機工株式会社

協力：エフソンアヴァシス株式会社、株式会社オフィス渋谷、遊美、株式会社一兎舎

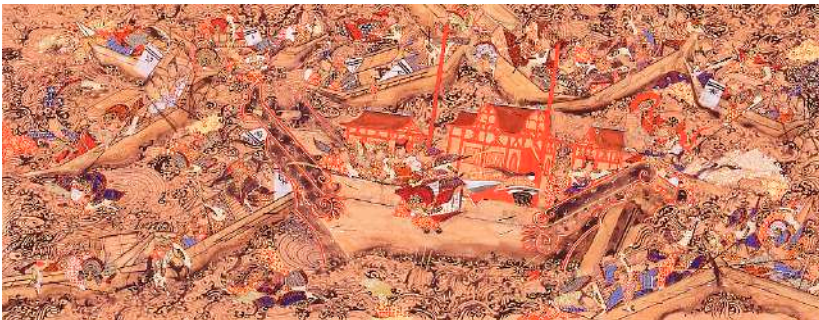


図1 『繪巻平家物語』 知盛 (ほるぶ出版) より 1990年 個人蔵

今年は瀬川康男の没後10年にあたります。本展では、東京を離れて制作に没頭した1977年以降の作品を、日記につづったことばとともに展示します。「いないいないばあ」で知られる瀬川の、画家としての人生と絵にかけた思いを紹介します。

日記『坦雲亭日乗』

1960年に初の絵本『きつねのよめいり』を出版した瀬川は、3作目の『ふしぎなたけのこ』で第1回BIBのグランプリを受賞、以後、仕事の依頼が相次ぎ多忙を極めます。体調を崩した瀬川は、1977年から5年間、群馬県の北軽井沢で過ごした後、1982年に、長野県の山間にある青木村に居を移しました。土間や五右衛門風呂がある古い大きな家を「坦雲亭」と名付け、長い廊下の先にある日本間をアトリエにして創作に没頭します。

1983年夏から、瀬川は「坦雲亭日乗」と題した日記を書き始めます。愛犬や友人、里山の人々と交流した穏やかな時間、張りつめた創作の時間——亡くなるまで書き続けた日記には、坦雲亭で過ごした時間が記録されています。

絵本『繪巻平家物語』 知盛

「こんどは、絵が俺を、引いて行く。苦しみながら歩け、行ける所まで行け、と云う」

日記『坦雲亭日乗』より 1990年7月14日

1983年から1990年まで、瀬川は、平家物語に登場する人物の人生を全9巻で描く絵本シリーズ『繪巻平家物語』の制作に取り組みます。膨大な資料と取材をもとに構想を重ねた本作は、「絵のために苦しむことはみな苦しんだ、という気がする」と語る創作となりました。

最終巻は、平清盛の三男であり、平家滅亡を見届けた武将・知盛の物語です。この巻では、西洋の古典的絵画技法・テンペラが使われました。知盛が平家全滅の瞬間に船上から入水する壇ノ浦の戦い(図1)では、テンペラの透明な絵の具層が、波間や背景で独特の光沢を放っています。

「知盛」の題箋が付いた画帳には、下

絵の数々とともに、各武将の名前、知盛との関係、船上での行動などを書き記した頁があり、武者合戦の緻密な構想のあとを見ることができます。すべての人物の動きや表情、鎧の模様までも丁寧な描いたこの絵本には、壮大な歴史のなかに生きた人々ひとりひとりの人生が描きこまれています。

絵本『だれかがよんだ』

「身に寸鉄も帯びず、無一物で生きる 四つ足のものたち、オビと、チーを、思う」

日記『坦雲亭日乗』より 1997年8月23日



図2 『だれかがよんだ』(福音館書店) 1989年 ちひろ美術館寄託

1981年、瀬川は北軽井沢の家の庭に来ていた茶色い犬を「オビ」と名付けて飼い始めます。坦雲亭でも、白い雄犬・チーも伴って行く散歩を日課にしながら、十数年をともに暮らしました。オビは瀬川の自作の絵本『だれかがよんだ』(図2)に登場しています。「おび おいで」の呼び声に、「だれかは だれか」と答えると、声の主である野の花や月のうさぎが姿をあらわします。ことばの繰り返しが次の展開を期待させます。

瀬川は、画家・田口安男に、かねてより興味があった黄金背景のテンペラ技法の指導を受け、この絵本に用いました。「彼岸の空間を簡単に表現しうる唯一の材料」である金箔の背景のなかで、植物や犬たちは等しく存在し交流しています。

写生からタブローへ

「花が生まれ 育ち咲くように素描すること」
黒いノートより 1970年代後半

1977年、北軽井沢に移った瀬川は、自然の形と向き合うため、山の植物を採取

しては無心で写生をしました。鉢に植えて成長を観察したものもあり、「植物志」と書かれた黒い手帳には、ふきのとうの成長のようすや、葉や茎の長さをミリ単位で記録しています。葉の凹凸や密集する小さな花卉をも細密に描いたふきのとうの写生(図3)には、「無限の長さと感じるまで、息をつめてみつめてみる。植物は植物の形をぬぎすてて、金色



図3 「ふきのとう」 1970年代後半 個人蔵

にかがやく本来の顔をあらわす」と語っていた画家のまなざしや、その先に見たいのちの姿が写しこまれています。

「基本の形が見えてくる 白昼夢の形であるあの無限に変化してやまない 細胞の原型これが世界の基本形」

日記『坦雲亭日乗』より 1996年7月10日

1981年夏、瀬川は手帳に「植物写生を休む」と書きます。植物の形の完璧な美しさに触れ、「写生じゃ、追いつかない」と悟った画家は、写生を通してとらえたものを、絵本だけでなくタブローを舞台に独自の表現として結実させていきました。



図4 「夢にとぶ」 2005年 エフソンアヴァシス株式会社蔵

「夢にとぶ」(図4)では、フクロウとともに、文様や線の装飾が画面全体を埋め尽くしています。素粒子同士が接触して放つ光の曲線・クォーク線の写真を見たとき、自らが目にしてきた「無限に変化する模様」の正体であると確信した瀬川は、いのちの根源にある形を、波動の模様で描き出していきました。

「絵からものがたりが生まれる ものがたりから絵が生まれる そのあわいのところで おれは生きていた」と語った瀬川康男。絵に向けた渾身の思いとその表現をご覧ください。(宍倉恵美子)

「石内都展 都とちひろ ふたりの女の物語」展示関連イベント

2019年12月14日(土)、2020年1月25日(土) 石内都ギャラリートーク

「石内都展 都とちひろ ふたりの女の物語」に関連し、石内都自身によるギャラリートークを開催しました。内容の一部を紹介します。(上島史子)

展示室1の「1974.chihiro」は私の最新作です(図1)。遺品の写真を撮りながら、ちひろという人を解釈していく感じでした。私の撮影は、自然光で、35ミリで、手持ちなんです。1月の安曇野で、前の日に雪が降ったので心配しましたが、思った以上に雪の反射がきれいで、ちひろの在り方が演出されたような気がしています。

私は2000年12月に、母を亡くしています。その年の3月、84歳の母の誕生日に撮った皮膚の写真と、亡くなってから撮った下着の写真が、2階に展示している「Mother's」です(図2)。母ともっと話をしようと思っていた矢先に死んでし



図1 展示室1 「1974.chihiro」

まって、どうしていいかわからないときに、タンズから下着が出てきたんです。その下着を写真に撮ることで、母とコミュニケーションできるかもしれないと思って。母の遺品も自然光で手持ちで撮ったんですが、ちひろさんと異質なのは、やはり気持ちが違うんでしょうね。母のときは喪失感があまりにも大きくて。

私の写真にはキャプションがありません。私はこうだっということ、あまりいいたくないのね。写真だけを見ていただいて、あとは良くも悪くも、いろいろなことを自分で感じてもらえたらいいなと思います。

「ふたりの女の物語」としたのは、手に職を持ってちゃんと生きてふたりの女の歴史が、私自身や、私の次の世代までつながっていく感じがしたから。いわさきちひろはあまり興味のない画家だった

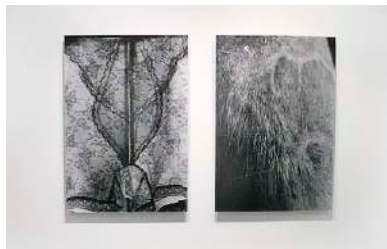


図2 展示室2 「Mother's」



図3 展示室4

んですが、母と同じような状況で生きてきた女が、もうひとりいたことにショックを受けて。母の藤倉都(旧姓名・石内都)は大正5年生まれで、ちひろさんの2つ上の同世代でした。ふたりとも手に職を持っていて、しかも7つ年下の人と再婚しているんです。

ここ(展示室4・図3)では、ふたりが遺した古い写真を大きく拡大しています。こうして見てみると、写真がふたりの生き方を今に伝えている。まさに歴史を体現しています。私は記録写真が苦手、真実なんてどこにも写っていないって思っていたのですが、今回、写真の力ってすごいよなど、写真そのものに対する発見もありました。母と娘ってという関係は、なかなか難しいんですよ。同じ女性という立ち場で、母を客観的に見つめ直すことができたのは、ちひろさんのおかげです。

2019年11月30日(土) 対談 石内都×上野千鶴子「ふたりの女の物語 都とちひろ」

旧知の仲の社会学者・上野千鶴子と石内都の対談を開催しました。1時間半に及ぶ対談の一部を紹介します。

(上島史子)



上野: 私はいわさきちひろが子どものときからずっと好きだったの。ペンネームをつくるときに、「岩崎」にしようと思ったくらい。あなたはちひろさんの絵を好きでした?

石内: やさしくて、きれいで。それはわかるんだけど、テイストが私と違って、まったく興味がなかったんですよ。だから、去年安曇野のちひろの生誕100年の展覧会に呼ばれたときに、仰天したの。でも「ひろしま」の展示は断らないって決めていたから。

上野: 「ひろしま」のつながりで、このまったく水と油みたいなコラボができて、化学反応が起きたんですね。ちひろさんの遺品の写真と「Mother's」は、対照的ですね。ちひろさんの衣服の写真は

ほとんどアウトターで、しかも少女っぽいドレスで。都さんの遺品は、ほとんどインナーです。肉体を閉じ込めていた下着が、かつてあったものの不在を象徴するかのようで、ドキッとするような生々しさがありました。やっぱり対象との距離のとり方が、ちひろさんのものとの間では、圧倒的に違う。

石内: 母の方は死んだ数か月後で、ちひろさんは45年経っているんですよ。私は別に遺品を撮りたいわけじゃない。

「Mother's」の場合は喪失感が大きくて、いない相手を探す、みたいなね。下着は第二の皮膚といわれています。つまり、母の皮膚がタンズの中にいっぱい詰まっていたわけ。そうすると、やはり撮らないと気がすまない。

上野: でも喪失を撮っただけとは、私には到底思えなくて。私が観客として「Mother's」を最初に見たときは、目をそむけたい思いがしましたよ。自分の母なら見たくない。そこに生々しく女が立ち上がっているから。子どもは一般的に母が女であることを許さないのよ。そういうアンビバレンツってなかったの?

石内: 撮っているときはあまりそういう気はしなかったんですけど。作品という

のは、自分からどんどん離れていくの。初めの思いなんて消し飛ばさなきゃいけない。ベネツィア・ピエンナーレのときに特に感じたんですが、たくさんの人に見られることによって作品そのものがどんどん変質していくんです。ベネツィアでは母の写真が気持ちよさそうにたたくんでいた。今回はそのときと同じ写真を展示していますが、久しぶりに見た「Mother's」は、ちひろさんとの関係もあって、また違う距離感で見えました。ずっと「Mother's」というシリーズには、なにか解決できない問題があったの。でも今回、なぜ「Mother's」を撮ったかということが、はっきり見えてきたような気がしています。母の古い写真が捨てられずに残っていたということや、母の旧姓名の「石内都」を名乗ったことも含めて、母から私自身、そして未来につながっていく、なにかひとつの線みたいなものを感じています。

上野: ちひろさんと藤倉都さんが生きていたらお友達になったでしょうか。

石内: いや、ならないと思う(笑)。この展示は、私の創作みたいなものですよ。生身の母とちひろさんとは、別の話かな。

ひとこと ふたこと みこと



1月4日(土) 善き日に

末娘が生まれた日が2011.12.15、亡くなった日が2011.12.15。お姉さんになるはずだったもうひとりの娘とうかがい、ここ図書室でさまざまな本と出会って12月15日がちひろさんの誕生日と知りました。亡き娘は私たちにいろいろな問いをもたらしてくれます。最初、死を嘆き悲しんでもがいてるとき、周りで聞こえるあかちゃんの泣き声が辛かった。私が抱いてあげたい、私だったらここまで泣かせないだろうに。しかし、時は心を癒すものです。ちひろさんの子どもの絵は、亡き娘の成長のアルバムをひとつひとつつめるよう。(空にも子をもつ母より)

1月10日(金)

去年、一昨年、一昨々と立て続け

に家族を亡くし、帰れる実家も失い、喪失感に生きる意味を見失いつつ、なんとか令和2年を迎えました。少しでも自分が楽しいと思えることで心を素直に過ごしていきたいと思い、いろんな場所に出かけています。今日は来館できてほんとによかった。ちひろさんの絵ややさしいお顔に心があたたくなり、このノートに書かれている方のことばにも励まされました。ありがとうございました。(R)

【「石内都展 都とちひろ ふたりの女の物語」の感想ノートより】

11月3日(日)

石内都さんの写真が好きで展覧会を見に来ました。ちひろさんの遺品の写真はどれもめくもりを感じ、「Mother's」の写真は女性としての色気を感じました。一見つながら

りがなさそうなふたりがひとりの写真家を通じて接点を持ち、それぞれの人生が浮き彫りになった展示だったと思います。(30代女性)

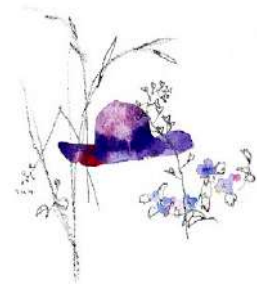
11月12日(火)

ドライバーとして生きた都、画家として生きたちひろ、ふたりの女性のパワーを感じることができました。心に響く展示でした。私の名前は Moon Myeonjoo です。韓国のソウルから来ました。(原文英語)

11月16日(土)

群馬に所縁のあるひとりの女性の生涯を垣間見られてよかったです。たまたま群馬から両親とともに来た偶然に感謝。子どもの声が響く館内に平和の尊さを思いました。描くこと、撮ることを始めてみたくなる、そんな空間でした。Thank you Chihiro & Miyako. (K.I.)

美術館 日記



11月4日(月) ☀

あかちゃんと子どものための鑑賞会。ことばが話せなくても作品を指さしたり、興味のあるなして反応が異なるようすなどを体験してもらい、子どもと展覧会を楽しむヒントを伝授。気軽に美術館を訪れるきっかけになることを願う。



11月24日(日) ☂ のち ☁

日本の魅力を世界に伝える NHK WORLD「Face To Face」に石内都さんが出演。ちひろの遺品を撮り下ろして展示されるまでが映し出され、新作「1974.chihiro」に込められた思いが海外に向け発信されるよい機会となった。

12月10日(火) ☁

先日水彩技法の出前講座で訪問した千代田区高齢者活動センターの方々が来館。千代田区は、疎開先の信州から27歳で単身上京したちひろが最初に暮らしたゆかりの場所。参加者にはまさにちひろが住んだ神田のブリキ屋ののちに養子に入った女性もいらして、当時の町のようになど貴重なお話をうかがう。

1月2日(木) ☀

2020年の開館初日。ショップでは、今年の干支にちなみ、レオ・レオニのねずみのカードが入った年始恒例の福袋や、昨秋発売されたちひろの「どうわかるた」が好評。ちひろが昭和30年代に手がけたかるたの復刻版は、一寸法師や金太郎など11の童話と当時の子どもの生活の一幕が描かれた懐かしい雰囲気。今の子どもたちに手に



して遊んでもらえるとうれしい。

1月4日(土) ☀

ちひろの復元アトリエを前に愛用の品々や家族とのエピソードなど、ちひろの人となりを紹介するアトリエトークを開催。ちひろの作品をご存知の方は多いが、その人生を知る方はまだ少ない。ちひろの作品とともに、その思いも伝える機会を今後も設けていきたい。

1月10日(金) ☀

ちひろ生誕の地である福井県から10年前に球根をいただいた越前水仙が今年も花をつけ始めた。可憐な白い花からただよう甘い香りに、ひと足早い春の訪れを感じる。

窓

「歴史の事実を目をそらすことなく」

竹迫祐子(公財) いわさきちひろ記念事業団事務局長

2019年12月6日、「アウシュビッツ・ビルケナウ・ナチス・ドイツの強制・絶滅収容所、1940年から1945年まで」を訪れ、犠牲者を追悼したドイツ連邦共和国アンゲラ・メルケル首相は、アウシュビッツ・ビルケナウ基金創立10周年記念式典で、かつてのホロコーストの生存者を含めた人々を前にスピーチを行いました。そのなかで彼女は、「どのようなことばをもってしても、ここで侮辱され、ひどい苦痛を受け、殺害された多くの人たちの悲しみをあらわすことはできません。それでもなお、他に類のない人類に対する最大の犯罪が行われたこの場所で

話すことがいかに困難であろうとも、沈黙が私たちの唯一の答えであってはなりません」と語り、さらに、1939年10月にドイツ帝国に侵攻されたポーランド領の同地、アウシュビッツ(現オシフェンチム)は、「ドイツ人の、ドイツ人によって運営された絶滅収容所だった」のであり「この事実を強調すること」「加害者の名前をはっきり言うことが重要です」と語りました。近年、歴史が繰り返すようにヘイトクライムが深刻化するドイツ。だからこそ、過去の歴史を直視し、加害の責任は終わることはないと明言した姿勢は、今の日本のあり方とは大きく

異なります。

ヨーロッパでは、2018年のスペイン・マドリードを皮切りに、「Auschwitz not so long not so far」と題した展覧会が各地で開催、アメリカへも巡回しています。会場入口には、アウシュビッツの生存者のひとり、プリモ・レヴィ氏のことばが訪れた人を迎えていました。

「それは起こった。だから、これからも起こり得る。そのことが、私たちが語らねばならない核心である。それは、起こり得る。どこでも起こり得ることなのだ」。繰り返してはならない歴史に、私たちは目をそらすず一歩踏み出したいものです。

●次回展示予定 2020年5月21日(木)～8月2日(日)

生誕110年 赤羽末吉展 絵本への一本道



赤羽末吉 『かさじぞう』(福音館書店)表紙 1960年

『かさじぞう』や『だいくとおにろく』『スーホの白い馬』など、今も読み継がれる絵本を描き、日本で最初に国際アンデルセン賞画家賞を受賞した赤羽末吉。物語の確かな解釈と類まれな演出力、幅広い表現力を備えた赤羽は、天性の絵本作家といえる人でした。

本展では、明治の終わりから平成の初めまでの、日本の絵本が発芽し大きく花開いていった時代に、赤羽がたどった絵本作家への道を、絵本の原画やスケッチ、数々の資料からひも解きます。

2020年 今後の展示予定

●8月6日(木)～10月25日(日)

ちひろ美術館コレクション 日本の絵本の歩み—絵巻から絵本へ—
こんには！『窓ぎわのトットちゃん』

ちひろの花鳥風月



いわさきちひろ
藤の花と子ども 1970年

日本では古来より「花鳥風月」を主題とした絵が数多く描かれてきました。みずみずしい感性で自然をとらえたちひろの絵のなかにも、日本の美意識が脈々と受け継がれています。本展では、四季のなかで遊ぶ子どもを描いた代表作や絵本『あめのひのおるすばん』を展示し、自然を愛おむ感性や構図に見られる表現など、日本の伝統的な美術との接点を探ります。

●10月29日(木)～2021年1月31日(日)

子どもの心を見つめて いわさきちひろ展
ちひろ美術館コレクション 絵本の世界を飛び出して

ちひろ美術館・東京イベント予定 <https://chihiro.jp/>

各イベントの予約・お問合わせは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。イベント参加費のほか、別途入館料が必要です(高校生以下は無料)。*イベント申し込みは、先着順です。また、参加費が記載されていないイベントは無料(入館料のみ)です。

*掲載内容は予告なく変更する場合がございます。 TEL.03-3995-0612

〈展覧会関連イベント〉

●編集者が語る 一坦雲亭で生まれた絵本

編集者として瀬川康男を担当し、坦雲亭をたびたび訪れていた川崎康男氏が、画家の坦雲亭での日々や絵本づくりについてお話しします。

- 日 時：4月5日(日) 15:00～16:30
- 講 師：川崎康男(福音館書店 元編集者)
- 定 員：50名 要申し込み 3月5日(木)受付開始
- 参加費：700円(別途入館料)



『ぼうし』(福音館書店)より

●わらべうたあそび

リズムにあわせて体を動かしたり、声を出して歌ったり。物語への入り口となる「わらべうた」を親子で楽しみます。

- 日 時：4月4日(土) 11:00～11:40
- 講 師：服部雅子(西東京市もぐらの会代表・はとさん文庫主宰)
- 定 員：15組30名 要申し込み 3月4日(水)受付開始
- 対 象：0～2歳までの乳幼児と保護者



●子どもと未来を考える講座
しるしる憲法ワークショップ

私たちにとって当たり前の日常が、どれほど憲法と深く結びついているか、普段あまり意識をする機会はありません。憲法記念日を前に、日常生活に照らし合わせながら、日本国憲法をじっくり「体験」します。

- 日 時：4月19日(日) 10:30～12:30
- 定 員：12名 要申し込み 3月19日(木)受付開始
- 対 象：小学生以上
- 参加費：1300円(入館料・資料代込み、特製クリアファイル付き)

〈参加自由、無料のイベント〉

●松本猛ギャラリートーク

ちひろの息子である松本猛が、作品にまつわるエピソードなどをお話しします。

- 日 時：3月8日(日) 15:30～
- 講 師：松本猛(ちひろ美術館常任顧問)



撮影：島崎信一

●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日 14:00～

●絵本のじかん

毎月第2・4土曜日 11:00～
協力：ねりま子どもと本ネットワーク

●入館料改定のお知らせ

ちひろ美術館(東京・安曇野)では、2020年3月1日より、入館料を改定いたします。各種入館割引の詳細は、ちひろ美術館公式サイトでご確認ください。

○ちひろ美術館・東京

大人1000円/高校生以下無料/団体(有料入館者10名以上)、65歳以上の方、学生証をご提示の方800円/障害者手帳をご提示の方とその介添えの方(1名まで)無料/リピーター割引500円(次回ご来館時に、正規料金の半額。ご本人様のみ1回有効)

○安曇野ちひろ美術館

大人900円/高校生以下無料/団体(有料入館者20名以上)、65歳以上の方、学生証をご提示の方700円/障害者手帳をご提示の方とその介添えの方(1名まで)無料

○年間パスポート(両館共通) 3000円

特別展開催時は、特別展料金を設定する場合があります。

CONTENTS 〈展示紹介〉 いわさきちひろ 子どものしあわせ—12年の軌跡…②

没後10年 瀬川康男 坦雲亭日乗—絵と物語の間…③

〈活動報告〉 石内都ギャラリートーク/対談 石内都×上野千鶴子「ふたりの女の物語 都とちひろ」…④
ひとことふたことみこと/美術館日記/窓「歴史の事実に目をそらすことなく」…⑤

美術館だより No.208 発行2020年2月20日